

第2回勉強会（川地域）の開催報告

1. 実施概要

当日の実施概要を以下に示します。

(1)実施概要

○実施日時：平成23年3月4日(金)

18:30 ～ 20:30

○会場：とよた市民活動センターホール

○参加者：57名（事務局含む）

(2)内容

【プログラム】

1. 開会
2. 挨拶
3. 講演
大同大学 鷺見准教授による
「私から見た「矢作川」」
4. 活動発表
「矢作川治水史研究会」
「早川をよみがえらせる会」
「家下川を美しくする会」
「早川をよみがえらせる会」
5. 内田先生のコーディネートによる意見交換
6. 閉会



講演の様子



意見交流の様子

(3)参加者出欠

		所属	氏名
市民会議	1	個人	丹羽 八十
	2	個人	田中 一弘
	3	個人	菅原 正
	4	個人	篠原 敏典
	5	伊勢・三河湾流域ネットワーク	井上 祥一郎
	6	伊勢・三河湾流域ネットワーク	松井 賢子
	7	豊田市自然愛護協会	光岡 金光
	8	早川をよみがえらせる会	篠原 正樹
	9	BIO de BIO	黒田 武儀
	10	三河湾浄化市民塾	榊原 和久
	11	三河湾浄化市民塾	篠原 信子
	12	家下川を美しくする会	原田 範次
	13	家下川を美しくする会	伊奈 浩
	14	矢作川 川会議	碓 さくら
	15	矢作川学校	内田 良平
	16	矢作川学校	白金 明子
	17	矢作川環境技術研究会	澤口 廣
	18	矢作川環境技術研究会	野田 賢司
	19	矢作川水系森林ボランティア協議会	稲垣 久義
	20	矢作川治水史研究会	小澤 祐治
	21	矢作川治水史研究会	杉浦 宏
	22	矢作川天然アユ調査会	新見 克也
	23	矢作川天然アユ調査会	宮田 昌和
	24	矢作川森林塾	碓 伸夫
	25	矢作川水族館	酒井 博嗣
	26	西三河野鳥の会	高橋 伸夫
関係団体	1	中部電力株式会社 岡崎支店	宮下 誠司
	2	明治用水土地改良区	竹内 清晴
	3	矢作川沿岸土地改良区連合	神谷 恵介
	4	矢作川水系漁業共同組合連合会	新見幾男
	5	矢作川沿岸水質保全対策協議会	天野 博
学識経験者	1	大同大学	鷺見 哲也
	2	愛知工業大学	内田 臣一
	3	愛知県水産試験場内水面漁業研究所	宮川 宗記
	4	東京大学 愛知演習林	蔵治 光一郎
	5	豊田市矢作川研究所	山本 敏哉
行政	1	安城市 建設部 土木課	市川 公清
	2	豊田市 河川課	北村 元良
	3	豊田市 河川課	佐野 慎吾
	4	豊田市 環境政策課	酒井 齊
	5	愛知県 建設部 河川課	田宮 睦雄
	6	環境省 中部環境事務所	榊 厚生
	7	中部地方整備局 河川部 地域河川調整官	村上 由高
	8	中部地方整備局 豊橋河川事務所長	畠山 愼一
	9	中部地方整備局 豊橋河川事務所 事業対策官	溝口 敏明
	10	中部地方整備局 豊橋河川事務所 調査課長	武田 真吾
	11	中部地方整備局 豊橋河川事務所 調査課 専門職	宇野 利幸
	12	中部地方整備局 矢作ダム管理所	山下 裕也
	13	中部地方整備局 矢作ダム管理所	鈴木 良
	14	事務局補佐 建設技術研究所	長谷川 翔生
傍聴			7名

2. 講演内容

大同大学 鷲見准教授による「私から見た「矢作川」」

【自己紹介】

- ・ 専門は水文学、大学が名古屋市にあるため、矢作川についてはよそのものである。
- ・ 川で起こる現象などについては理解しているものの、矢作川については、その歴史や皆さんの活動について知り尽くしているわけではない点をご承知おきいただきたい。
- ・ 今回の講演では上流河川・支川については扱わないことをご承知おきいただきたい。

【小さく眺める：ダム群】

- ・ 堰も含めたダム群は、洪水調整、治水、利水（発電など）、用水の機能がある一方で、次のメリットと影響がある。
 - メリットと影響として、洪水をそのまま流さないことから、下流では洪水時に流量が減る現象が起きている。一方で、最近の約10年間では、川の攪乱が減ってきているため、下流の水質・生態系へ影響を与えている。
 - 矢作ダムが出来たことで流量が減っていることも考えられる。
 - 土砂をためた後にしばらく流さないため、川の中の地形へ大きな影響を与える。護岸・橋梁の橋脚が浸食で危なくなるという問題もある。
 - 水を貯めることで、平常時の流量が制御されて、川の流量・水位が不自然に変動する。
 - 水や物質や生物をいったん貯めるため、流れる状態とは違う水質・生物相が現れる。下流の水質・生態系へ大きな影響を出すことがある。
 - 発電、用水施設等の構造物により、水位のギャップが生じ、水域不連続な箇所があるため、生物が遡上できないという問題がある。

【小さく眺める：川】

- ・ 中流域（越戸から明治用水頭首工）の環境としては、下記の問題がある。
 - 豊田市区間については、鮎のよい漁場であるものの、土砂供給の減少によって砂の喪失が起きており、結果として、河床がアーモコート化（河床から砂・礫分が流失し、大粒径の石だけが残る粗粒化する現象）した。
 - 糸状の生物が大量に繁茂しており、具体的には、カワシオグサの大繁茂、カワヒバリガイの定着、ヒゲナガカワトビケラが礫に固着しているなどの現象が起きている。
 - 生態系の問題としては、かつての浜が失われたものの、川は豊田市内の緑の回廊としての役割があり、大切にしなければならない。市も中央公園として整備を予定していることを聞いている。
 - 横断方向のエコトーンとして、水域、水際、砂州・河畔、植生河畔林、陸域などをデザインする必要がある。特に、生物から見るとどのように見えるのかという点を考慮し、緩やかに陸地に近づいていくのかというゾーン設定をしたいと考えている。
 - 人間の水域利用という面では、釣り場としての利用がある一方で、藻の発生やアーモコート化により困難になっている面もある。

- 水際の川利用について、水際に近づきにくいという問題がある。例えば、川に近づかないよう学校で注意されていることや、浜の消失によって水深が深くなっていて危険になっていることがある。
 - 一方で、市街地に近いのに川に近づけないというもったいなさがあるので、高水敷の魅力アップを図ること等、まちづくりと一体となった取り組みが必要でもある。
- ・ 下流域（明治用水から上塚橋）の環境としては、次の現状及び問題がある。
 - 昭和40年ごろは美しい砂州の景観だったものの植物は少なく、平坦な交互砂州で、出水時に川幅いっぱいに流れていた。
 - 砂礫地の生態系は生態系が成立していることが分かっている。
 - 昭和40年代の写真を見ると、わんど・たまりなどの緩流域がセットで構成されているものの、現在、堤防からはヤナギなどが樹林しており、眺望が良くないうえに、浜に降りようという気が起きない。
 - 植物が生えている場所は、最初は平坦であるものの、土砂を含んだ流水によりマウンド化している箇所もある。
 - 高水敷を造成した結果、公園的な面積が23%あるものの、グラウンドが多く、川ならではの利用は少ない。
 - 樹木も多く、水辺への景観も見通しにくい。水際は植林、水際の水深が深く、遊び場としては必ずしも適さない。
 - 水域については、水上バイクをはじめとした、マナーの問題、ゴミの投棄の問題がある。
 - ・ 河口域（上塚橋～河口）
 - 昭和40年代と現在を比べると、干潟が約2割に減少し、ヨシ原も約半分に減少した。
 - 土砂供給が低下し水域の河床が低い。
 - 河口域独特の水の匂いが無い。

【川を大きく眺める】

- 上下流問題がある。具体的には、川を介して通過する、もの・水・エネルギーを、人がどのように捉えていくのか、考えていかなければならない。
- 山から海まで流域圏として、住む人の意識の交流・理解が重要となる。

【川部会・流域圏懇談会の課題について】

- 様々な人・組織が川に関与しているため、各目線からどういう課題があるということを並べ直すことが必要。
- 思いや課題にはいろんな目線、レベルがあるという前提のもと、まとめる必要がある
- みんなでテーブルを囲むことも大事だが、参加者・関係者が1対1で連携・話し合いすることもよいのではないかな。
- 地域部会では、ご意見のあった課題について、まとめるというよりもグルーピングをした。

- 地先としての川と地域の関係として、地域の人も含めて関係を構築することが重要。
- 上下流問題として、特に参加者の方々の意識の交流を図って頂きたい。
- 流域圏としては、地域部会での意見交換をうけて、各参加者が「知らないこと」を知ることが大切。そのことを認識していただきたい。

【矢作川治水史研究会：小澤祐治氏】

- ・ 組織として、正式にたちあがったのは平成22年だが、以前から活動はしていた。
- ・ 活動目的としては、矢作川の過去の災害（水害・地震）の文献等を集めて、河川技術者の目で見つめ直して、防災意識の向上を図るための、普及・啓発することを目的としている。
- ・ 現在の川の状態は絶えず変化しているので、その変化を細かく記録している。具体的には川の状態を比較できるよう、定点での撮影をしている。
- ・ 現在は、資料収集が主な活動であり、周辺の資料館、神社にある碑も治水史の観点から見直している。
- ・ 四季の写真集、川のボランティア活動への積極参加（清掃活動）も行っている。
- ・ 困っていることは活動日程のメンバー間の調整。
- ・ また、堤防にあるチェーンなどで車両の進入が難しく、現場調査に行くのに時間がかかる。
- ・ 現在、メンバーが高齢化しているため、後継者を求めているもののなかなかいない状況。
- ・ これからはテーマを絞ってまとめて、沿川の学芸員などとの意見交換の場を通じて、地域に発信していきたい。

【家下川を美しくする会：伊奈浩氏】

- ・ 平成18年度に発足。もともと家下川は矢作川の中にあつたが、現在は川には水がないので、水の無い場所を利用したいと考えて活動を開始した。
- ・ 家下川に木や草が生えてきたため、歩けるようにするため、それをみんなで刈って歩けるようにした。
- ・ 国交省が木を除去し、矢作川の土をいれてくれたおかげで、草を刈るのが楽になったため感謝している。今年からは大型機械で草を刈ることが可能となり、歩きやすくなった。
- ・ 竹が生えてきたことに困った際に、地元住民250名と企業（三菱自動車など）からボランティアを集い、竹を切った。切った竹は、再利用する意味で、ドンド焼き（無病息災を祈る）に活用し、学区内の子供達に来て頂いて、竹の炭でもちを焼いて食べた。
- ・ 今後の問題は、草刈りが大変ということが一番大きい。
- ・ 将来的には、河川敷に位置づけていただくことで、舗装の整備やゲートボール場整備なども可能となるようにしたい。
- ・ みなさんにボランティアとして参加していただきたい。

【矢作川環境技術研究会：野田賢司氏】

- ・ 清流を守る工事の実践・普及活動が主な活動内容、実行するということが一番大切と考えて活動している。
- ・ 矢作川の汚濁を防止し、清流を取り戻すため、関係者で協議、工事にて濁流を抑えるなど、

環境保全に配慮した施工技術を支援している。

- ・ 発端は、1986年に企業の枠を超えて色々な現場の所長・担当者があつまり、仮設防災など、環境配慮技術の体系化を図ったこと。参加は約250社。
- ・ 工事現場における泥水対策をどうするかということを発信している。施工管理の仕方によって濁水の出方が10倍違うことは重要な認識である。
- ・ 研究会としては、啓発・普及活動（年1回）や現地研修会を実施している。その他、研究事業や出版事業を行っている。
- ・ 今後は、「濁水を“きれいにする”から“自然に戻す”へ」ということと、情報・コミュニケーションの面で、個人とその周辺の人を含めた「地域社会とのコミュニケーションの推進」を図っていくことが重要と考えている。

【早川をよみがえらせる会：篠原正樹氏】

- ・ 三河湾浄化市民塾と連合体を組んでいる。
- ・ 目的として、川や海がきれいになってうまい魚を食いたいということ。
- ・ 早川の生態系を昔のように再生させるのが目的。
- ・ 福岡中学校の生徒が生態系（早川へのアユの大量遡上などの映像を紹介。）についての動画を紹介。
- ・ やれる範囲でやっているため、問題点はとくにない。
- ・ 今後は、頼まれごとはやることをモットーとして進めていきたい。

3. 意見交換会（コーディネーター：愛知工業大学 内田先生）

- ・ 砂がたまるようになったが河床高が上がっていない。アーマーコート化では説明できない現象が起きているのではないのか。また、川幅が広くなり、流速が低下することで藻が発生している。これを抑えることは出来ないか。
 - 河床の異なる場所がある。河床が低いところは砂が多い。出水が起こると深いところが出来て、さらに砂が貯まるという悪いスパイラルに陥っている。土木河川工学的には、河床が下がっていること、水位が固定していることが考えられるが、最適な川幅も存在するはずである。
- ・ 家下川の導流堤は、上郷地区で起きた内水処理機能の向上を目的として、導流堤の整備を伴う河川改修を行ったことがはじまりと理解している。この導流堤の効果をきちんと把握することが重要だと感じた。
 - ご指摘の点と活動対象区間とは少し異なっているが、ご指摘の点について、ご意見として認識させて頂く。
- ・ 早川をよみがえらせる会について、EM菌の効果はどの程度あるのか、BODなどに変化が見られたかなど具体的に教えて頂きたい。
 - BOD、CODについては、市が測定しているが結果は出ていない。微生物が増えていることから、アユが増加していることが考えられる。
 - 下水道の普及に伴い、早川の水量が減っていることをお聞きしている。将来的にはこの現象が問題になると考えられる。
- ・ 篠原先生が所有している映像の中に、天然アユの大量の遡上の話が出ていたので見たいと思う。アユの大量遡上の要因はEMの影響があると思うが、他に何が考えられるか。
 - 川にあるユスリカの巣をねらっていることも考えられる。
 - 川底の石表面に付着した珪藻（ケイソウ）をアユが餌としていることから、珪藻（ケイソウ）の発生が原因として考えられるのではないか。
- ・ 河床の変化について、昭和40年以降、高度成長に伴い、砂採集が行われた結果。かなりの量が減少した。現在の高水敷が昔の河床ではないかと思う。地水上、東海豪雨規模の減少が起きた場合にどうなるか、興味がある。河床の変化と安全性について、考えるべきである。
 - この懇談会の中で、参加者各人同士で、重要と思う課題について議論されることが大切だと考えられる。
- ・ 矢作川の堤防をイメージしたときに、景観としてベストな部分はどこか。
 - 景観について、矢作川の縦断をすべて見ているわけではないが、湾曲している部分については特徴のある景観であるため、これを維持していくことが大切だと考えられる。

- ・ 知らないことを知ることができてよかった。課題を選んだうえで、解決を考える必要がある。川部会という一つのくくりで議論するのはやや狭い感じがする。本川と支川で分けるなど川部会の進め方についても検討していく必要があるのではないかと。
 - ある程度、範囲を絞った方がよい一方で、この懇談会では、色々な課題・問題点が有機的につながっているところが良い点であり、個別の部会等で情報が完結され、シャットダウンされてしまうのはよくない。議論の輪をより細かくすることについては、他の部会等が何をしているかがわかることが前提条件となることを考えているが、事務局としてはどのような考えをお持ちか教えて頂きたい。
 - 議論の進め方については、内部でも決定されていない。小さな課題に対応するワーキンググループを作ることについて、規制をかけることはない。一方、情報共有という面での、ホームページの内容については、まだ緩いため、みなさんで作り上げていきたいと考えている。

- ・ 見える化がまだ見えない状況である。この勉強会の議事要旨についても、今日参加できなかった方々、あるいは他の部会の方に提示し、情報共有をしていくということによいか。
 - よい。

- ・ 各団体からの報告が5分しかなく伝わり切らないのではないかと。意見については、共有の時間を増やすとよい。山部会ではメーリングリストの活用が活発に活用されており、1日5通くことも稀ではない。流域圏懇談会のメンバーも数ヶ月に1度会うだけでは足りない。山部会の課題はだいぶクリアになってきており、部会メンバーの数人で13日の会議前に集まって打合せをすることを決めたなど、機運が高まってきている。川や海の部会でもそうなるとうい。

- ・ 河川整備計画がベースになっているので、官で出来るところと出来ないところがある。市民が河川整備計画を理解していないという点も、問題ではないかと。
 - 河川整備計画については、管理する側から見れば使いやすいものである一方で、住民など立場の異なる方にとっては、必ずしも使いいいとは限らないが、流域圏の問題として河川整備計画のみについて議論することは、立場の異なる方々の意見交換としては必ずしも現実的ではない。

以上